

診療部門等活動実績

内科（総合診療科）

常勤医2名及び研修医で、内科系疾患の初期対応、何科で診療すべきかの判断、救急車の受け入れ、専門診療科への振り分けが困難な患者の入院診療を担当。

年間の入院患者数は300名あまりで、感染症から進行がんの苦痛緩和まで広範囲の領域に対応しているが、肺炎、尿路感染症などの感染症が多い傾向にある。病状安定後は、地域のかかりつけ医へ継続診療を依頼している。

診療実績

(単位: 件)

	ICD	平成28年度	平成29年度	平成30年度	平均在院日数(日)
入院件数		324	365	350	19.6

主な疾患名と件数

誤嚥性肺炎	J69\$	77	79	119	24.9
肺炎	J13-J18\$	43	49	36	16.4
敗血症	A41\$	25	44	22	28.5
インフルエンザ	J10\$,J11\$	9	10	5	10.4
急性腎盂腎炎	N10	16	25	31	16.1

消化器内科

常勤医5名で、食道から肛門まで肝臓・膵臓を含めた消化・吸収に関する部位の内科的疾患の診療にあたった。

肝・胆・膵疾患においては、急性疾患をはじめ助成金の対象となるC型慢性肝炎のインターフェロン+リバビリン療法経口2剤併用療法、B型慢性肝炎の核酸アナログ療法を行っている。

消化管疾患においては、上部内視鏡検査は年間約3,500件、下部内視鏡検査（大腸検査）は約2,000件施行している。また、食道・胃静脈瘤の出血に対しても内視鏡的硬化療法や結紮術治療、BRTO等を行っている。

最近は炎症性腸疾患（潰瘍性大腸炎・クローン病）の増加が著しく、潰瘍性大腸炎は約150名、クローン病は約30名ほど治療を行っている。炎症性腸疾患には血液浄化療法やモノクローナル抗体療法をいち早く導入し、良好な成績を上げ、日常生活を重視した治療を心がけている。

大腸癌に関しても、食生活の変化などから増加傾向にあり、便潜血反応検査の普及に伴い、特に早期大腸癌の増加が目につく。当院では侵襲の少ない内視鏡手術である内視鏡的粘膜剥離術を積極的に行っている。

診療実績

（単位：件）

	Kコード	平成28年度	平成29年度	平成30年度	平均在院日数（日）
入院件数		997	891	1050	11.5
入院内視鏡件数		583	536	595	9.9
内視鏡的大腸ポリープ・粘膜切除術 （長径2センチメートル未満）	K7211	240	215	253	3.1
内視鏡的消化管止血術	K654	88	63	65	12.7
内視鏡的胆道ステント留置術	K688	61	67	79	18.5
内視鏡的乳頭切除術 乳頭括約筋切開のみのもの	K6871	50	48	57	15.0
内視鏡的胃、十二指腸ポリープ・ 粘膜切除術（早期悪性腫瘍粘膜下層）	K6532	51	44	44	8.9
内視鏡的大腸ポリープ・粘膜切除術 （長径2センチメートル以上）	K7212	32	32	34	4.0

血液内科

悪性リンパ腫や多発性骨髄腫、骨髄異形性症候群といった血液腫瘍のほか、再生不良性貧血などの貧血疾患、特発性血小板減少性紫斑病のような血小板疾患など、血液疾患全般にわたって診療を行った。

紹介医療機関は、川口市内に限らず近隣市からも紹介されてくる。無菌病床1床を急性白血病の寛解導入及び発熱性好中球減少症の管理に運用している。無菌病床の運用率はほぼ100%である。造血幹細胞移植が必要な場合は、東京都立駒込病院、東京慈恵会医科大学附属病院と連携して実施した。

診療実績

(単位:件)

	ICD	平成28年度	平成29年度	平成30年度	平均在院日数(日)
入院件数		317	252	279	28.4

主な疾患名と件数

悪性リンパ腫	C85\$	14	2	8	18.5
多発性骨髄腫	C900	40	58	26	33.7
骨髄異形成症候群	D46\$	25	17	13	21.4
急性白血病	C920	60	31	41	37.4
慢性骨髄性白血病	C921	10	13	8	26.0
骨髄増殖性腫瘍 (CML 以外)	C88\$	3	1	6	13.7
特発性血小板減少性紫斑病	D693	7	7	12	28.6
貧血 (再生不良性貧血など)	D61\$	7	6	10	21.3

脳神経内科

脳神経内科では、脳・脊髄・末梢神経・筋肉に至る広い領域をカバーしながら、高次脳機能障害・運動障害・感覚障害などをきたす疾患の診断治療を行っている。

スタッフは、常勤医3名、外来は午前中毎日行っている。

外来では、パーキンソン病、脊髄小脳変性症などの神経難病をはじめ、てんかん、頭痛などの機能性疾患についても幅広く診療を行っている。また、2013年春から物忘れ外来を開設し、認知症の診断・治療方針の決定を行っている。

入院では、脳梗塞、中枢神経感染症（髄膜炎・脳炎など）、免疫性神経疾患（多発性硬化症・ギラン・バレー症候群・重症筋無力症など）などの治療を行っている。

診療実績

(単位:件)

	ICD	平成28年度	平成29年度	平成30年度	平均在院日数(日)
入院件数		280	281	277	20.7

主な疾患名と件数

脳梗塞（エダラボン有り）	I63\$	85	97	83	20.9
脳梗塞（エダラボン無し）	I63\$	42	39	34	21.1
てんかん	G40\$	28	25	21	14.1
パーキンソン病	G20	5	9	19	36.5
炎症性多発(性) ニューロパチ〈シ〉ー	G61\$	8	7	13	22.2
重症筋無力症	G700	7	5	13	17.7

※平成30年度は神経内科の名称

呼吸器内科

肺がん、気管支喘息、COPD（肺気腫、慢性気管支炎）、間質性肺炎などのびまん性疾患、肺炎をはじめとした、呼吸器感染症などの疾患の診療を行っている。

肺がん診療は、呼吸器外科、放射線科と連携し、対象患者に合った治療法を実施。

喘息、COPD の治療には吸入療法が重要であるため、院内及び近隣薬局の薬剤師と吸入指導の勉強会を年に数回実施。

新薬の治験や、他施設との共同による臨床試験に参加し、治療提供のための開発や研究に携わっている。

診療実績

(単位:件)

	ICD	平成28年度	平成29年度	平成30年度	平均在院日数(日)
入院件数		776	790	711	17.2

主な疾患名と件数

肺がん	C34\$	424	476	434	16.9
気管支喘息	J45\$	4	4	6	8.2
COPD 肺気腫	J44\$	6	3	16	17.4
びまん性疾患	J84\$	31	26	27	23.7
肺炎	J13-J18\$	85	78	77	15.7

腎臓内科

腎疾患一般（早期腎炎から慢性腎臓病、末期腎不全、透析導入に至るまでの総合的治療・管理）に関する外来・入院治療を行っている。

腎炎が疑われる場合は、腎生検を実施、腎病理所見により治療方針を決定する。保存期腎不全の場合は、透析療法の開始を遅らせることを目的に、薬物療法・食事療法により進行を抑制している。

腎代替療法が必要な場合、血液透析・腹膜透析を実施するが、患者のライフスタイル等を考慮したうえで治療法の選択を行い、透析の準備から導入までを行っている。

診療実績

（単位：件）

	平成28年度	平成29年度	平成30年度	平均在院日数（日）
入院件数	232	319	266	19.0

主な治療内容と件数

腎生検数	41	40	34	14.5
血液透析数	169	187	181	23.8
腹膜透析数	29	25	16	14.7

糖尿病内分泌内科

1型・2型糖尿病、妊娠糖尿病などとともに、甲状腺疾患、下垂体、副腎疾患などの内分泌疾患についても外来、入院において積極的に診療を行った。

特に糖尿病診療においては病診連携を積極的に行い、他院より紹介された患者については、極力入院の上での加療を心掛け、退院時には可能な限り紹介元への逆紹介を行っている。

また、医師、看護師、薬剤師、栄養士、臨床検査技師などで構成される糖尿病チームを形成し、週1回のチームカンファレンスで入院患者情報の共有、様々な職種の様々な視点からディスカッション、病棟回診を行った。年3回の外来糖尿病講座、1回の市民公開講座を開催、患者やその家族、市民への啓蒙活動を行った。

さらに、持続血糖モニタリングシステム（CGMS）などを用いた臨床データを積極的に収集し、学会などでの発表も数多く行った。

診療実績

(単位:件)

	平成28年度	平成29年度	平成30年度	平均在院日数(日)
入院件数	225	237	205	15.9
糖尿病教育入院件数	130	131	105	15.5

循環器科・集中治療科

常勤医9人体制で、心臓超音波、ホルター心電図、冠動脈 CT、心臓 MRI、心筋シンチグラフィ等心臓モダリティを駆使し、心臓疾患を中心に虚血性心疾患、心不全、不整脈管理をはじめとする診療を実施した。一方で、下肢の閉塞性動脈硬化疾患の増加もあり、MDCT や下肢 MRI を施行、他科と連携し下肢インターベンションも行った。頻脈性不整脈に対するアブレーションや心房細動に対する抗凝固薬の管理を行うとともに、冠動脈カテーテル検査やペースメーカー植え込み等の予定入院患者にはクリニカスパスを導入した。

また、当科は集中治療室を管理していることから、急性心筋梗塞、不安定狭心症、急性心不全、不整脈疾患などの心血管緊急症に対し、必要に応じ緊急カテーテル治療や体外式ペーシングを施行し、集中モニター管理はもとより人工呼吸器、持続的心拍出量監視装置、大動脈バルーンパンピング (IABP) 等により、24 時間体制で積極的な治療を行った。

さらに、市内の病院、市消防局等とともに川口 CCU ネットワークを構築し、地域の循環器疾患の早期受入を行った。

平成 29 年には心臓外科が併設され、心臓弁膜症、重篤な狭心症などの心臓血管疾患の外科的加療も可能となった。

診療実績

(単位: 件)

	平成28年度	平成29年度	平成30年度	平均在院日数 (日)
入院件数	590	642	620	13.2

主な治療内容と件数

心カテ件数	404	362	285	10.3
PCI 件数	211	182	133	-
PTA 件数	23	25	21	14.5
ペースメーカー植え込み術及び電池交換術	30	35	25	12.2
アブレーションカテ件数	3	8	51	4.2

小児科

小児科は、例年どおり急性疾患の患者を主として、専門外来にも従事する診療に当たった。2018年度外来患者数は約30,000名強、入院数は1,186名で、前年度と比して若干減少傾向だった。ただし、重症患者は多く、特に長期間の呼吸器管理を要する重症心身障碍児（者）が high care 病床を占めているのが以前からの課題である。大学の関連病院の中で、気管内挿管数はトップレベルで、また、中堅医師が多く PALS インストラクターも1名いるため指導も充実し、若手医師の研修には救急の基礎と応用を学ぶ上で最適の病院と考える。大学内での勤務希望者は多い。

各種専門外来は患者多数であるが、特に、周辺病院に専門医が少ない発達障がい、内分泌、循環器の患者が多い。発達障がいのための臨床心理士は多数にもかかわらず、1か月程度の検査待ちになっている。また、学校心臓検診の二次検診を委託され対応している。

2018年度は各種学会・研究会での発表8回、うち1回は初期研修医、3回は後期研修医が発表した。ほかに、講演3回、PALS 講習1回、県医師会から委託の小児救急研修会1回、学会座長2回、論文は原著3編、依頼原稿1編だった。

診療実績

(単位:件)

	平成28年度	平成29年度	平成30年度	平均在院日数(日)
入院件数	1,347	1,228	1,186	5.2

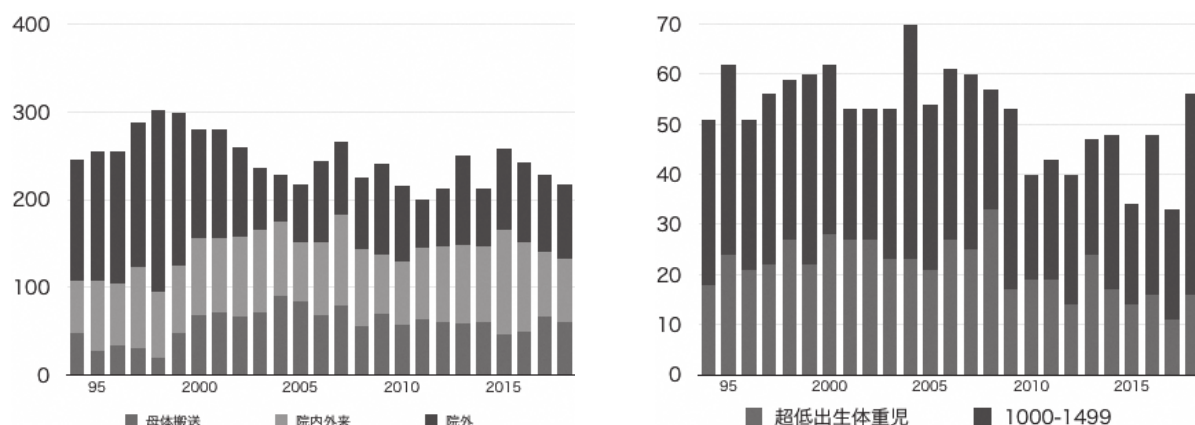
主な治療内容と件数

感染症（下記分類以外）	87	77	66	5.6
呼吸器疾患	437	404	405	6.2
循環器疾患（川崎病以外・救急救命）	4	5	9	4.3
内分泌・代謝疾患	149	83	78	4.2
神経疾患（髄膜炎・脳症含む）	90	54	64	6.1
アレルギー疾患・皮膚疾患	132	127	179	1.8
腎・尿路疾患	34	49	38	9.1
消化器疾患	160	156	117	4.2
血液・免疫疾患（川崎病含む）	47	57	49	4.1
新生児疾患	13	8	19	5.6
小児外科疾患	128	117	108	7.0
外傷・熱傷	13	11	10	3.4
その他	37	53	17	5.8

新生児集中治療科 (NICU)

埼玉県南東部をカバーする地域周産期母子医療センター（産科30床、NICU30床：NICU加算9床+GCU21床）のNICU部門として診療を行っている。県内2つの総合周産期センターと役割分担しながら活動をしている。しかし、当周産期センター担当の埼玉県南東部地域では、年間1,000分娩以上規模の産科施設や、様々な公的病院を受け持っており、超早産の切迫早産、前期破水などの母体搬送受け入れ、妊娠高血圧症候群、甲状腺機能異常などの合併症妊娠、多胎（双胎、品胎）妊娠などの外来紹介は、引きもきらず依頼がある。また、在胎35週以上で出生体重2,000～2,500gのlate pretermの低出生体重児であっても、呼吸循環血糖などが落ち着いていれば、当科管理の下、産科病棟で母児同室を行っている。2018年度のその数は71名だった。重症児の出産が予想される場合、新生児科医が両親に対しprenatal visitを行っている。また、週1回産科新生児科カンファレンスを持っている。

2018年度の新生児集中治療科（NICU・GCU病棟）への入院は220名、母体搬送からの入院60名、極低出生体重児は36名（超低出生体重児10名）だった。挿管人工呼吸管理53名、全身麻酔手術症例は13例（新生児症例5名）、眼科光凝固術2例、死亡退院2名（剖検0例）だった。また、小児外科、脳神経外科、形成外科などとの連携において、新生児外科疾患の術前術後管理も行っている。循環器外科疾患に関しては、小児循環器医と診断、急性期の治療を開始し、stabilize後に循環器専門施設（榊原記念病院、県立小児医療センターなど）へ搬送している。小児科循環器、内分泌医や眼科眼底検査回診や整形外科医、理学療法士、臨床心理士などの回診もある。



フォローアップ外来を月・水・金の午後行っている。極低出生体重児の学齢期までのフォロー、在宅医療児の支援、母乳育児支援などを行っている。気管切開、在宅酸素、在宅人工換気などの在宅医療を必要とする患児の増加もあり、小児科と密接な連携のもと、診療を行っている。また、発達評価や心理面でのフォローを臨床心理士3名にお願いしている。スタッフは常勤医7名（うち新生児専門医2名）、特別研修医（後期研修医）3名、非常勤1名である。日本周産期・新生児医学会の新生児研修基幹施設に認定されており、当科出身の周産期（新生児）専門医は8名となり各施設で活躍中である。忙しい業務と並行しながら、論文掲載は、医学雑誌2編、学会発表は、全国学会8題、埼玉地方会など8題発表した。また、東京医科歯科大、防衛医大などの医学生実習、その他埼玉県立大学、川口市立看護専門学校などの看護助産学生実習などの研修指導教育に協力している。

毎年1-2回、NICU退院児の同窓会を開いており、同時期に入院していたご両親達や元主治医、病棟看護師と久しぶりの歓談に花が咲く。退院児たちの近況報告や先輩の体験談、講師を招いての発達発育などに関する講義なども行っている。平成6年の開設時から、全入院患児は6,300名を超え、1,500g未満の極低出生体重児は1,300名、そのうち1,000g未満の超低出生体重児は525名であった。高校を卒業して、大学進学が決まった、就職が決まったなどと、毎年うれしい報告が寄せられる。

これらをmotivationとし、intact survival (後障害無き生存)を目指して、今夜もNICUは働いている。私達の日々の診療活動が、子ども達の未来にダイレクトに繋がっている。

診療実績

(単位:件)

	平成28年度	平成29年度	平成30年度(日)
入院件数	242	229	220
院内出生数	151	141	132
母体搬送数	49	66	60
院内外来	102	75	72
院外出生数	91	88	85
超低出生体重児	16	11	10
極低出生体重児	32	33	36
極低 院内	31	30	32
極低 母体搬送	18	19	20
極低 院外	1	3	4

精神科

診療は、原則として当院の他科で加療中であり精神的なケアが必要な患者のみを対象としているが、2018年7月から病診予約を開始し、予約患者の外来診療をスタートさせた。

患者支援センターの看護師、社会福祉士、精神保健福祉士等の他職種とも協働しながら、精神療法や薬物療法のほか生活歴、家族状況、社会生活上のさまざまな課題等を多面的・総合的に把握したうえで診療を行った。

消化器外科

消化管のがん及び炎症性腸疾患やイレウス、肝胆膵のがん及び胆石・脾臓の良性疾患など、多岐にわたる診療を実施した。

消化器系の疾患は経口摂取が困難であることが多く、手術だけでなく点滴や経管栄養などによる栄養管理、呼吸、循環系を含む周術期の全身管理も治療の中心となる。診療の多くは、各領域のがんに対する手術となるが、術前後の化学療法、がん性疼痛を含む再発がんに対する対症療法、あるいは胆石症、鼠径部ヘルニアなどの良性疾患、虫垂炎をはじめとする腹膜炎、腸閉塞に対する治療、さらには内視鏡診断や処置、テレビレントゲン下での処置、肝臓がんに対する肝動脈塞栓化学療法など扱う領域は広い。

がん治療に関しては、外科医のみでなく消化器内科、放射線治療医やがん研有明病院化学療法科から派遣される化学療法専門医と協力し、集学的治療を実施した。

主な術式

手術名	症例数	開腹手術	腹腔鏡下手術	腹腔鏡下手術割合(%)
胃切除	32	18	14	43.8
胃全摘	19	12	7	36.8
結腸切除	82	24	58	70.7
直腸切除（APR含む）	50	11	39	78.0
肝切除	20	18	2	10.0
胆嚢腫瘍手術	15	14	1	6.7
胆嚢摘出術（良性）	105	9	96	91.4
総胆管結石手術	14	14	0	0
腸閉塞手術	20	13	7	35.0
虫垂炎手術	56	27	29	51.8
腹膜炎手術（上部消化管穿孔）	13	0	0	0
腹膜炎手術（下部消化管穿孔）	10	0	0	0
鼠径部ヘルニア（閉鎖孔含む）	114	113	1	0.9
腹壁ヘルニア	6	1	5	83.3

乳腺外科

近年乳がんは増加傾向にあり、検診の普及に伴い小病変が発見される機会が多くなっている。外来では、小病変に対しても確実かつ正確な診断を行っている。厚みのある乳房にも感度・特異度とも高い Digital Breast Tomosynthesis を導入した。今後検診でも乳房構成判定を受診者に告知する方向になると思われるが、新しいバージョンの乳腺量測定ソフトを導入し、機械判定の方向を模索している。また、マンモグラフィは痛いと感じられるが、圧迫時の痛み軽減を目的とした、乳房の圧迫を自動減圧制御する Comfort Comp; 通称 なごむねを導入した。癌と診断がついた場合には subtype に応じて、また、進行度も加味して、手術、化学療法、ホルモン療法、分子標的治療、放射線治療などの集学的治療を行っている。ホルモン感受性陽性、Her 2 陰性のリンパ節転移がないかもしくは少数個の方に対しては、希望があれば、OncotypeDX の結果も含めて術後治療を考慮している。

また、エクспанダー、インプラント認定施設であり、形成外科と協力し、乳房再建も可能である。再発が認められた場合も、現在数多くの分子標的治療薬が使用可能となっている。コンパニオン診断を含め、遺伝子変異からアプローチする治療が多くなっており、腫瘍内科、精神腫瘍科、認定看護師、リハビリテーション科、ソーシャルワーカー等様々な専門職種の介入によりチーム医療を行っている。

診療実績

(単位: 件)

	Kコード	平成28年度	平成29年度	平成30年度	平均在院日数 (日)
入院件数		205	136	145	11.6
手術件数		130	82	78	11.0

主な手術名と件数

乳腺悪性腫瘍手術(乳房切除術) (腋窩部郭清を伴わない)	K4763	51	29	29	10.2
乳腺悪性腫瘍手術(乳房部分切除術) (腋窩部郭清を伴わない)	K4762	44	31	29	7.6
乳腺悪性腫瘍手術(乳房切除術) (胸筋切除を伴施しない)	K4765	19	12	11	14.7

呼吸器外科

肺縦隔疾患に対し最適な外科治療を行うことを目的に、常勤の呼吸器外科専門医2名体制で診療に当たった。

原発性肺がんに対しては、呼吸器内科、放射線科、病理診断料などと密に連携して、最適な治療を行う。ステージⅠ・Ⅱ期では基本的に胸腔鏡を用いた小開胸、低侵襲手術を施行。安全性を最優先にしており、必要があれば開胸手術も選択する。Ⅲ期以上の場合は、放射線や抗がん剤を組み合わせた集学的治療を行うこともある。最近の動向としては、術後再発例に対し、分子標的薬の導入や免疫チェックポイント阻害剤による治療にも積極的に取り組んでいる。

今後も、各種セミナーなどに参加しスキルアップを図るとともに、関連する呼吸器内科、放射線科、病理診断料、精神腫瘍科や薬剤部、緩和ケアチームなどと密に連携して、胸部悪性疾患に対する治療を推し進めたいと考えている。

診療実績

(単位:件)

	Kコード	平成28年度	平成29年度	平成30年度	平均在院日数(日)
入院件数		180	183	134	10.7
手術件数		104	124	93	11.3

主な手術名と件数

胸腔鏡下肺切除術 (肺嚢胞手術(楔状部分切除))	K5131	24	39	18	9.4
胸腔鏡下肺悪性腫瘍手術 (肺葉切除又は1肺葉を超える)	K514-23	20	21	27	11.3
胸腔鏡下肺悪性腫瘍手術 (部分切除)	K514-21	13	13	11	9.3
肺悪性腫瘍手術 (肺葉切除又は1肺葉を超える)	K5143	10	6	6	14.0
胸腔鏡下肺切除術(その他)	K5132	8	6	7	8.8

小児外科

日本小児外科学会認定の指導医が常勤し、新生児から15歳以下の小児の外科疾患を担当。

鼠頸部疾患（鼠径ヘルニア、陰嚢水腫、停留精巣）の疾患が多いが、肺嚢胞性疾患に対する肺切除、水腎症に対する腎盂形成、膀胱尿管逆流症に対する手術、さらに新生児症例（出生前症例を含む）など、様々な疾患に対応している。

また、鼠径ヘルニア、急性虫垂炎、胃食道逆流症などに腹腔鏡手術を積極的に取り入れ、できるだけ傷を小さくし患者の身体負担を軽減している。

診療実績

（単位：件）

	平成28年度	平成29年度	平成30年度	平均在院日数（日）
入院件数	159	149	158	4.7
手術件数	150	153	160	4.5

主な手術名と件数

腹腔鏡下鼠径ヘルニア手術	32	31	30	3.0
鼠径ヘルニア手術（Potts）	21	25	21	3.0
停留精巣固定術	25	17	22	3.3
陰嚢水腫手術（交通性陰嚢水腫手術）	11	8	15	3.0
臍ヘルニア手術	7	16	9	3.8
急性虫垂炎	15	17	23	-
新生児手術	7	11	4	-

脳神経外科

常勤4人体制で診療を実施。脳神経外科指導医3名、脳卒中専門医3名、脳神経血管内治療指導医1名、専門医2名、脳卒中の外科技術指導医1名、定位機能脳神経外科技術認定医1名など多数の専門資格を有している研修施設となっている。2018年10月から常勤医が5人になった。

主な手術は、脳動脈瘤、脳腫瘍、脳梗塞、頭部外傷である。入院及び手術件数が年々増加している。

脳神経外科当直を週4回実施し、救急患者を積極的に受け入れた。発症8時間以内の急性期脳梗塞に対しては血管内治療による血行再建治療を積極的に行った。これについては、搬入、画像検査、t-PA静注、穿刺、再開通までの時間が短縮している。

脳卒中後には後遺症が残るため、多職種合同カンファレンスを毎週開催し、治療方針の検討、円滑な退院およびリハビリ転院に取り組んでいる。

診療実績

(単位:件)

	Kコード	平成28年度	平成29年度	平成30年度	平均在院日数(日)
入院件数		389	449	484	16.8
手術件数		194	211	225	22.2

主な手術名と件数

慢性硬膜下血腫穿孔洗浄術	K164-2	41	48	48	9.0
脳血管内手術(1箇所)	K1781	20	22	28	24.9
経皮的脳血栓回収術	K178-4	14	20	24	27.0
頭蓋内血腫除去術(開頭)(脳内)	K1643	14	15	17	38.8
頭蓋内腫瘍摘出術(その他)	K1692	12	14	9	39.1

整形外科

当科では、関節外科、脊椎外科、外傷外科、スポーツ整形外科、手外科、腫瘍外科、リウマチといった分野にそれぞれ専門医がおり最先端の治療にあたっている。特に、人工膝関節、股関節手術、脊椎外科手術において、身体に負担の少ない最小侵襲手術を行うことにより、術後の疼痛の軽減、早期リハビリテーションの開始、入院期間の短縮に取り組んでいる。

また、埼玉県南部医療圏で唯一の救命救急センターが併設されているために、多発外傷や開放骨折などの重症の患者に対し、救命救急医と協力して即時創外固定などの初期緊急手術を行なうことが多くなっている。

今後も病診・病病連携を推進し、関節外科、脊椎外科などの高難度の変性疾患に対する手術の増加を図るとともに、基幹災害拠点病院の役割として、救急医療に関しても積極的に取り組んでいく。

診療実績

(単位:件)

	Kコード	平成28年度	平成29年度	平成30年度	平均在院日数(日)
入院件数		885	932	1036	21.0
手術件数		971	1,120	1,238	22.1

主な手術名と件数

人工関節置換術 肩、股、膝	K0821	157	140	158	26.7
脊椎手術	K1422 K1425 他	104	100	144	-
骨折観血的手術 肩甲骨、上腕、大腿	K0461	69	122	138	28.4
骨折観血的手術 前腕、下腿、手舟状骨	K0462	63	76	88	21.2
人工骨頭挿入術 股	K0811	41	63	62	35.7
骨折観血的手術 鎖骨、膝蓋骨、手(舟状骨を除く)、足、指	K0463	37	38	53	14.1
骨内異物除去術 前腕、下腿	K0483	39	29	48	8.0
骨内異物除去術 鎖骨、膝蓋骨、手(舟状骨を除く)、足、指	K0484	39	22	37	5.3

形成外科

形成外科の対症疾患は、熱傷、顔面骨骨折、体表の外傷、指の切断・骨折や腱断裂等の手の外傷、先天異常、母斑・血管腫・良性腫瘍、皮膚悪性腫瘍、乳がん切除後の再建、瘢痕・瘢痕拘縮・ケロイド等があり、常勤医3名で診療に当たった。そのうち形成外科専門医は2名であり、形成外科分野のほとんどをカバーできる体制をとっているが、レーザー治療の設備がないため、症例に応じてレーザー設備を有する病院へ紹介を行っている。

近隣に形成外科が少ないため、当科は県内有数の手術症例数を誇り、常勤医師一人当たりの手術件数も非常に豊富である。また、救命救急センターに搬送される多発外傷や重症外傷、熱傷等の患者について、救命救急センターや整形外科、歯科口腔外科等と連携して合同緊急手術も積極的に行っている。

診療実績

(単位：件)

	平成28年度	平成29年度	平成30年度
入院手術	219	242	231
全身麻酔	195	212	218
腰麻・伝達麻酔	0	1	0
局所麻酔	24	29	13
外来手術			
皮膚腫瘍摘出術（露出部）	210	204	195
皮膚腫瘍摘出術（露出外）	85	101	113
皮膚切開	86	108	94

心臓外科

当科は、平成 29 年度に川口市の地域医療発展を目的として新たに開設された。対症疾患として、成人の虚血性心疾患、弁膜症疾患、大血管疾患を主に診ている。

冠動脈バイパス術は人工心肺を用いない心拍動下冠動脈バイパス術（OPCAB）と人工心肺下で行う心拍動下冠動脈バイパス術（On Pump Beating CABG）とを症例に応じて選択。医師、看護師、理学療法士が一体となって心臓リハビリテーションを行い、早期退院へ向けて取り組んでいる。

大動脈弁狭窄症、閉鎖不全症、僧帽弁狭窄症、閉鎖不全症、三尖弁閉鎖不全症に対して大動脈弁狭窄症、閉鎖不全症あるいは僧帽弁狭窄症に対しては人工弁置換術（機械弁もしくは生体弁使用）を行い、僧帽弁閉鎖不全症や三尖弁閉鎖不全症に対しては弁形成術を実施。

心房細動（不整脈）を合併している症例に対しては、双極高周波アブレーションデバイスを使用して積極的に外科的治療を行う。大動脈基部から弓部大動脈までの胸部大動脈瘤に対しては人工心肺、脳分離体外循環を行って人工血管置換術を行う。

診療実績

（単位：件）

	Kコード	平成29年度	平成30年度	平均在院日数（日）
入院件数		18	22	29.0

主な手術名と件数

冠動脈、大動脈バイパス移植術（人工心肺不使用） （2吻合以上）	K552-22	0	7	33.0
冠動脈、大動脈バイパス移植術（1吻合）	K5521	1	0	-
冠動脈、大動脈バイパス移植術（2吻合以上）	K5522	4	5	50.2
弁形成術 1弁のもの	K5541	2	3	38.0
弁形成術 2弁のもの	K5542	0	1	31.0
弁置換術 1弁のもの	K5551	7	3	25.3
弁置換術 2弁のもの	K5552	0	1	17.0
弁置換術 3弁のもの	K5553	1	1	37.0

産婦人科

常勤医6人体制で診療に臨んでいる。産科領域では、切迫流産、妊娠高血圧症候群、前置胎盤、胎児発育不全、多胎妊娠、合併症妊娠などハイリスクの妊娠から正常の妊娠まで対応している。すべての妊娠に関して、外来診察時から入院、分娩時まで一貫して産科スタッフが対応し、安全、安心な分娩に努めている。

また、当院は周産期センターを併設しており、重篤な合併症を有する妊婦の母体搬送を埼玉全県から24時間体制で受け入れ、新生児集中治療科(NICU)と連携し、母体・胎児・新生児の集中治療を行っている。

婦人科領域では、子宮筋腫、卵巣腫瘍、子宮内膜症などの良性疾患、子宮頸がん、子宮体がん、卵巣がんなどの悪性腫瘍の診断及び治療、異所性妊娠(子宮外妊娠)、卵巣出血などの急性疾患の治療を行っている。

診療実績

産科

(単位:件)

	平成29年度	平成30年度
分娩総数	514	625
帝王切開	219	242
多胎妊娠	27	32
母体搬送	77	102
流産手術	14	14

主な手術名と件数

婦人科

	平成29年度	平成30年度
手術総数	208	257
良性開腹手術	100	150
腹腔鏡手術	62	74
悪性開腹手術	12	13
子宮頸部円錐切除術	20	18

眼科

当科は、医療センターに3名、本町診療所に2名の医師で診療を行った。白内障は通常の極小切開による手術から、難治症例や乱視矯正眼内レンズ症例の手術にも取り組み、外眼手術は眼瞼下垂や眼瞼内反などの瞼の手術を行った。網膜硝子体疾患等の手術に関しても、抗 VEGF 療法等、病態に応じて治療を行なった。手術機器が新しくなったことにより、より低侵襲な手術が可能となった。

病診連携においては、市内の眼科開業医、済生会川口総合病院、埼玉協同病院との間で定期的に連絡会を開き、強化を図っている。

診療実績

(単位:件)

手術件数	平成28年度	平成29年度	平成30年度	平均在院日数(日)
白内障・眼内レンズ挿入	609	738	696	2.2

耳鼻咽喉科

常勤医2名と応援医師で診療を行った。

入院加療の主なものは、扁桃炎や咽頭炎などの急性感染症、耳性めまいや突発性難聴、顔面神経麻痺などである。

また、手術は、扁桃摘出術、ラリングマイクロサージャリー、内視鏡下副鼻腔手術が大多数を占めており、悪性疾患や中耳手術、頸部膿瘍等の重篤な疾患は高次医療機関へ紹介を行った。鼻科手術は、内視鏡とマイクロデブリッターの併用により日帰りを含め短期の入院で行っている。

診療実績

(単位:件)

	Kコード	平成28年度	平成29年度	平成30年度	平均在院日数(日)
入院件数		85	107	129	6.9
手術件数		43	40	54	7.5

主な手術名と件数

内視鏡下鼻・副鼻腔手術	K340-3～7	20	13	22	6.6
扁桃周囲膿瘍切開術	K368	10	14	9	6.3
口蓋扁桃摘出術	K3772	6	6	8	9.3

皮膚科

外来診療のほか、带状疱疹、蜂窩織炎などの感染症を中心とした入院加療を行っている。午後は、皮膚生検、外来小手術、貼付試験などの検査や、ナローバンドUVBにて尋常性乾癬、尋常性白斑、菌状息肉症などに対する紫外線治療を行っている。また2010年9月に導入されたダーモスコープは悪性黒色腫をはじめ、色素を有する腫瘍の鑑別に役立っている。他科入院患者の依頼診察も多く、また毎週月曜日は形成外科と協力して、褥瘡専門外来、病棟の褥瘡回診を行っている。

地域の基幹病院としての立場を確立し、診療所との病診連携をすすめ、軽症な疾患は診療所へ、皮膚生検や各種検査が必要な疾患、または入院加療が必要な疾患の患者様をさらに多くご紹介いただけるように努力したい。

診療実績

(単位: 件)

	平成28年度	平成29年度	平成30年度	平均在院日数(日)
入院患者数	45	41	55	15.1

主な疾患

蜂窩織炎	6	16	24	10.4
带状疱疹	11	9	11	7.6
丹毒	5	0	3	6.3
水疱性類天疱瘡	3	1	1	6.0
多型滲出性紅斑	1	1	1	12.7
薬疹	2	1	3	12.3

泌尿器科

当科では、主に尿路（腎・尿管・膀胱）および男性生殖器（前立腺・精巣）に発生する悪性腫瘍や尿路結石とそれに伴う感染症の治療を行っている。

前立腺がんに対しては手術、放射線照射、ホルモン療法などの治療を行っている。また、腎がん、膀胱がんなどの悪性腫瘍についても、手術療法、化学療法、放射線療法も実施している。

尿路結石は時に重症の尿路感染症を引き起こす疾患であることから、積極的に日帰り可能な対外衝撃波結石破碎術や、確実に碎石・抽石する手段として内視鏡手術を行い、結石の除去に努めた。

また、前立腺肥大症に伴う排尿障害に対してはホルミウム・ヤグレーザーを用いた手術療法を実施。従来の内視鏡手術に比べ、早期の退院が可能となっている。

診療実績

(単位:件)

主要疾患手術件数	平成28年度	平成29年度	平成30年度	平均在院日数(日)
腎がん、腎盂・尿管がんの手術				
開腹	10	9	3	19.7
腹腔鏡手術	5	10	19	12.3
膀胱がんの手術				
全摘・尿路変更	6	4	3	32.3
経尿道的	94	129	101	10.6
前立腺がん手術				
開腹	13	17	9	16.2
腹腔鏡手術	0	0	0	-
尿路結石手術				
経尿道的尿路結石摘出術	58	66	103	7.7
経皮的尿路結石摘出術	3	15	21	14.1

主要術式別件数

主要疾患手術件数	平成28年度	平成29年度	平成30年度	平均在院日数
前立腺レーザー核出術	13	17	23	8.9
経尿道的前立腺切除術	2	12	5	11.2
前立腺生検	147	199	174	3.1

放射線科

2名の画像診断医及び非常勤医師で診断を、1名の放射線腫瘍医及び非常勤医師で診療を行った。
 温熱療法の新患患者数は2名／年と減少。放射線治療患者総数の増加、高精度照射の増加により、
 温熱療法を行う時間が制限されているためである。

他院からの放射線治療目的の患者さんは原則として当該科を介して当科を受診する仕組みとなっている。他院からの紹介率は5年間で14～38%となっており、埼玉協同病院、埼玉県立がんセンターが多数である。

2017年3月より、高強度変調放射線治療（IMRT）を開始し、放射線治療の高精度化に伴い、治療計画、装置の品質管理の総時間数が増大してきている。高度変調照射は、重要臓器への被爆を減らすことが可能なため、症例数は増加の一途である。

放射線治療新患数

	原 発	平成28年度	平成29年度	平成30年度
脳	脳腫瘍	2	7	4
頭頸部	上顎洞	0	0	0
	喉頭癌	0	0	0
	上咽頭癌	0	0	0
	中咽頭癌	0	0	0
	下咽頭癌	0	0	0
	舌癌	0	0	0
	口腔底癌	0	0	0
	耳下腺癌	0	0	0
	顎下腺癌	0	0	0
胸部	肺癌	88	114	70
	胸腺腫	3	2	0
	縦隔腫瘍	1	1	2
	乳癌	129	104	106
消化管	食道癌	3	5	3
	胃癌	3	2	3
	結腸癌	1	2	4
	直腸癌	12	15	11
	盲腸癌	0	0	0
肝胆膵	肝癌	4	2	3
	胆嚢癌	0	0	0
	胆管癌	1	0	0
	膵臓癌	2	7	1
婦人科	子宮頸部癌	4	4	3
	子宮体部癌	4	2	0

放射線治療新患数

	原 発	平成28年度	平成29年度	平成30年度
婦人科	会陰部癌	0	0	0
	卵巣癌	0	2	1
	膣癌	0	0	0
腎膀胱	腎盂癌	0	2	0
	腎癌	3	8	11
	膀胱癌	4	9	8
男性生殖器	前立腺癌	27	47	47
	精巣癌	0	1	0
	陰茎癌	1	0	0
	尿道癌	0	0	0
リンパ腫	非ホジキンリンパ腫	17	7	8
	ホジキンリンパ腫	0	0	0
血液疾患	白血病	1	1	2
	多発性骨髄腫	0	2	0
	急性骨髄生白血病	0	0	0
	慢性骨髄性白血病	0	0	0
	特発性血小板減少性紫斑病	0	0	0
原発不明	原発不明癌	1	3	2
皮膚	Merkel細胞癌	0	0	0
	皮膚癌	0	0	0
	悪性黒色腫	0	0	0
良性	ケロイド	2	8	4
肉腫	肉腫	0	1	0
合計		313	358	293

麻酔科

①平成30年度は手術件数が急増したうえに腹腔鏡下手術の増加に伴い、手術時間の長時間化が進行している。

②手術患者の高齢化、手術適応の拡大に伴いハイリスク患者の術前コンサルテーションが増加してきた。

③ペインクリニック外来においては、一般的な鎮痛薬での疼痛管理に難渋する疼痛患者に対し、神経ブロック、レーザー、生活指導などを通じて治療をおこなっている。疾患別内訳としては帯状疱疹、腰下肢痛が多いが、最近はボツリヌス毒素療法の適応となる顔面痙攣、眼瞼痙攣が増えている。

診療実績

(単位:件)

麻酔件数	平成28年度	平成29年度	平成30年度
予定	2,397	2,392	3,097
緊急	505	539	712

(単位:件)

	平成28年度	平成29年度	平成30年度
ペイン外来疾患別件数			
帯状疱疹痛、帯状疱疹後神経痛	13	19	26
複合性局所疼痛症候群 (CRPS)	0	0	0
求心路遮断痛	2	1	1
三叉神経痛	6	7	2
その他の神経因性疼痛	9	4	1
遷延性術後痛	1	3	1
頭痛・顔面痛	0	2	2
耳鼻科・眼科疾患 (顔面神経麻痺など)	5	3	3
筋骨格系疾患 (頸肩 upper limb 痛・腰下肢痛)	20	14	16
末梢血行障害・多汗症	1	0	1
癌疼痛	2	1	1
その他	3	1	1

当科の特徴

当科は歯科口腔外科疾患の診断、治療を専門にしている。難拔牙、外傷、炎症、腫瘍、嚢胞、粘膜疾患などである。地域の医療機関にとっての歯科・口腔領域の難症例の窓口として、患者さんにとって良いと思われる医療を提供することをモットーにしている。年間新患数約 4,300 人（紹介率 80%）とたいへん多い（大学病院同等か以上）。1日あたり 15 人以上の新患と予約患者さんを少ないスタッフで診療している。現在は常勤歯科医師 2 名、非常勤 2 名（それぞれ週 1 日）である。外来局麻できるものは外来でと考えているので、入院は増えてない。その代わり外来手術は種類、数とも増えている。ここ数年の特徴は薬剤関連性顎骨壊死（MRONJ）患者の増加である。緊急入院患者の 70% は顎炎、蜂窩織炎などに急性化した MRONJ 患者である。

診療内容

- 1) 難拔牙（親知らず、埋伏過剰歯、拔牙途中など）
低侵襲、迅速、確実、安全。滅菌済み 5 倍速エンジンを使用、年間約 3,000 本の智歯（上下合わせて）の拔牙。小児の上顎正中埋伏過剰歯も多く、どちらも基本は外来局麻手術。
- 2) 顎骨骨折、顔面骨折、などの外傷
手術では、口腔内切開で傷を残さない。手術は 350 例以上経験。
- 3) 顎骨の良性腫瘍、嚢胞
巨大なものは顎骨離断をせず開放創または開窓療法にて顎骨を保存している。
- 4) 口腔内、口唇の疾患
小児に多い下唇粘液嚢胞、がま腫、舌小帯強直症などは外来にて短時間で手術。
- 5) 顎炎、歯性上顎洞炎などの歯性感染症
特に重症例は、入院、造影 CT 撮影、切開排膿等即日に対応。MRONJ が非常に増えている。
- 6) 顎下腺唾石症や顎下型がま腫など
特に口腔内からの手術をこころがけている。従来は顎下腺ごと摘出していた症例も手術方法を工夫し口内から唾石のみ摘出手術。顎下型がま腫や嚢胞型リンパ管腫は薬物療法（OK-432）が第一選択としている。
- 7) 全身疾患の口腔症状の診断と治療
節外性悪性リンパ腫、貧血、白血病などの血液疾患、シェーグレン症候群、天疱瘡など
- 8) 口腔粘膜疾患
白板症、扁平苔癬の治療。舌癌、天疱瘡などの診断。
- 9) 入院患者の口腔ケアや嚥下障害の診断など
- 10) 対処できない悪性腫瘍、変形症などはすみやかに専門機関に紹介

診療実績

入院手術件数 全身麻酔手術

(単位: 件)

主な手術名と件数	平成28年度	平成29年度	平成30年度
悪性腫瘍（白板症を含む）	3	1	3
良性腫瘍	2	0	2
顎嚢胞	28	10	12
顎骨腫瘍	1	3	5
顔面骨折	11	8	6
唾液腺腫瘍	1	3	2
唾石	2	3	3
消炎手術	1	0	2
抜歯	1	2	2
その他	4	4	5
計	54	34	42

入院手術件数 全身麻酔以外

(単位: 件)

主な手術名と件数	平成28年度	平成29年度	平成30年度
消炎手術（MRONJを含む）	36	33	20
抜歯	1	0	0
その他	8	6	4
計	45	39	24

外来手術件数

(単位: 件)

主な手術名と件数	平成28年度	平成29年度	平成30年度
埋伏歯抜歯（本数）	1,913	2,072	2,150
正中過剰埋伏歯抜歯（症例数）	50	37	41
その他抜歯（本数）	1,875	2,017	1,971
腫瘍切除術	42	26	51
粘液貯留嚢胞摘出術	49	51	31
顎嚢胞摘出もしくは開窓術	91	87	100
歯根端切除術	25	23	40
消炎手術	158	186	200
外傷	44	26	27
外傷歯整復	18	19	10
骨隆起等形成術	8	20	40
インプラントなど除去術	9	9	20
小帯形成術	18	12	12
顎関節脱臼非観血整復術	7	15	20
唾石摘出	12	12	10
その他	15	28	17
計	4,334	4,640	4,740

リハビリテーション科

リハビリテーション科では医師2名（兼務、非常勤各1名）、理学療法士11名、作業療法士5名、言語聴覚士4名で診療にあたった。入院患者のうち主治医からの依頼を受けた方を対象としている。退院後の生活が不安なく送れるように、患者毎に必要性を評価して専門的な援助を行った。さらに、専門病院でのリハビリ継続が必要な場合の見立ても行っている。地域医療支援病院への移行に伴い、今後はさらに紹介患者の増えることが予想される。患者が予定どおりに不安なく退院できるよう、関係する各部署と連携を密にして援助していく。

診療実績

（単位：件）

疾患種別の実施件数		平成28年度	平成29年度	平成30年度
入院	運動器	9,499	9,660	9,616
	脳血管	8,381	9,754	9,962
	心大血管	1,688	1,836	1,586
	呼吸器	932	1,189	942
	廃用症候群	1,490	2,052	2,266
	小計	21,990	24,491	24,372
外来	運動器	1,632	1,214	1,118
	脳血管	1,117	815	716
	小計	2,749	2,029	1,834
入院＋外来合計		24,739	26,520	26,206

病理診断科

体制：常勤病理医3名（うち1名は検査科部長として出向）、非常勤病理医1名

以下の検査科臨床検査技師と協働した。

常勤臨床検査技師5名（うち臨床細胞検査士4名）

非常勤臨床検査技師2名（うち臨床細胞検査士1名）

年間活動目標：ISO15189 認定資格取得準備に協働する。

活動結果：検査科病理検査部門のみ先行して ISO15189 受審申請を行った。（2019 年2月）

業務実績：診断件数

（単位：件）

	平成28年度	平成29年度	平成30年度
組織診断件数	6,183	6,040	5,999
術中迅速診断件数	258	195	193
細胞診断件数	6,847	6,295	6,112
病理解剖件数	13	17	14

救命救急センター

埼玉県南部医療圏の3次救急患者を中心に、地域で収容困難な2次救急患者にも対応している。

救命救急センター専従スタッフは、救急医学の知識・技術に加え一般外科、脳神経外科などの専門性を生かし、24時間、重症外傷、多発外傷などの外傷症例はもとより、脳血管障害、急性腹症、心血管緊急症、急性呼吸不全、急性薬物中毒、熱中症などの環境障害、代謝性疾患など全身管理を要する傷病者の初療から緊急手術、集中治療、退院までの一貫した治療を行っている。

特に外傷においては、全国的に近年減少傾向にあるものの、当センターでは未だ搬送患者の3分の1を占め、外科系救急を主体とする当センターの得意とするところであり、高い水準を維持しながら治療にあたっている。

また、日々の救急業務以外にも救急救命士の育成、救命士に対する病院前救護講習を行い、災害発生時に被災地に派遣される災害派遣医療チーム DMAT として国および県の災害訓練にも看護師、コメディカルとともに参加し、大規模災害に対応すべく活動している。

診療実績

(単位:人)

疾病名	平成28年			平成29年			平成30年		
	患者数計	退院・転院 (転棟を含む)	死亡	患者数計	退院・転院 (転棟を含む)	死亡	患者数	退院・転院 (転棟を含む)	死亡
病院外心肺停止	241	27	214	262	27	235	294	35	259
重症急性冠症候群	1	1	0	3	3	0	1	1	0
重症大動脈疾患	1	0	1	4	3	1	4	3	1
重症脳血管障害	63	45	18	87	59	28	76	52	24
重症外傷	181	166	15	153	142	11	144	133	11
四指切断	0	0	0	0	0	0	0	0	0
重症熱傷	3	2	1	3	3	0	3	3	0
重症急性中毒	26	21	5	15	15	0	15	15	0
重症消化管出血	14	14	0	13	11	2	14	12	2
敗血症	9	8	1	6	5	1	2	2	0
敗血症性ショック	0	0	0	8	4	4	9	5	4
重症体温異常	5	4	1	19	16	3	24	20	4
特殊感染症	3	3	0	3	3	0	3	3	0
重症呼吸不全	13	9	4	11	10	1	13	12	1
重症急性心不全	6	6	0	3	3	0	2	2	0
重症出血性ショック	12	12	0	7	7	0	7	7	0
重症意識障害	15	14	1	21	21	0	34	33	1
重篤な肝不全	1	1	0	3	2	1	2	2	0
重篤な急性腎不全	6	6	0	2	2	0	0	0	0
その他重症病態	24	22	2	19	12	7	14	11	3
合計	624	361	263	642	348	294	661	351	310

※各年、1年(1月～12月)で集計

総合健診センター

現役世代の減少、健康保険組合の財政難などを背景として、人間ドックの総受診者数は微減が続いている。人間ドックに伴うオプション検査件数も減少傾向にあり、脳ドックも減少が続いている。一方、協会けんぽの生活習慣病予防健診の受診者は増加している。

2018年度は7月から川口市内視鏡胃がん検診が運用開始となり、2019年2月までの8ヵ月間に126人に利用された。発見された悪性疾患の内訳は、胃がん1人、悪性リンパ腫1人であった。

また、フォローアップ業務で確認した悪性疾患は胃がん1人、腎がん1人、肺がん1人、乳がん1人、前立腺がん2人、膀胱がん1人、その他(膀胱内乳頭粘液性腫瘍2人、骨髄異型性症候群1人)であった。

(単位:件)

健診区分別件数	平成28年度	平成29年度	平成30年度
人間ドック	2,066	2,061	2,038
脳ドック	71	56	45
一般健診	708	643	562
国保ドック	1,020	884	833
特定健診	405	387	449
協会けんぽ健診	1,761	2,007	2,285
予防接種	910	966	1,415
その他	65	58	279
合計	7,006	7,062	7,906

(単位:件)

オプション検査件数	平成28年度	平成29年度	平成30年度
腫瘍マーカー(CA125)	191	174	177
腫瘍マーカー(PSA)	489	482	507
子宮がん	668	630	636
乳がん	753	741	765
肺がん	247	252	237
胃内視鏡	991	981	1,112
頭部MRI	778	724	680
合計	4,117	3,984	4,114

(単位:件)

検査項目	平成30年度 検査実施数	要精検数	人間ドック受診者のフォローアップ結果		
			要精検率(%)	精検受診数	精検受診率(%)
MDL/胃カメラ	1,773	113	6.3	52	46.0
便潜血	1,987	66	3.4	45	68.2
胸部XP,CT,肺機能	2,021	49	2.5	39	79.6
マンモグラフィ	543	18	3.4	17	94.5
乳房超音波	547	18	3.3	17	94.5
子宮頸がん	379	19	5.1	16	84.3
腹部超音波	2,035	42	2.1	24	57.2
心電図	2,032	28	1.4	19	67.9
眼底	2,030	167	8.3	102	61.1

